

八代市の近世浄土宗寺院・荘厳寺の建築的特徴

森山 学* 才塚 光**

Architectural Characteristics of Syogon-ji in Yatsushiro-shi

Manabu Moriyama*, Hikaru Saitosuka**

A purpose of this paper is to clarify the architectural characteristics of Syogon-ji temple in Yatsushiro-shi. It is a Jyodo sect temple of the Edo era.

There are many traces of repair in the current main hall. As a result of having compared the current main hall with the old drawing of 1795 while considering them, it was revealed that the current main hall and the drawing were the same buildings.

Then the roof is shikoro form and these depth is 6ken. From this, it was built according to a law established in 1668 (kanbun8).

The plan is a prototype of the main hall of the Jyodo sect, but there are the inherent characteristics. They are asymmetry, the vague border of the inner sanctum (Naijin) and the unity of the inner sanctum (Naijin) and the outer chamber (Gejin). We considered that the reason of the latter was influence of the Jishu sect.

キーワード：八代市，近世寺院，浄土宗，時宗

Keywords：Yatsushiro-shi, Temple of the Edo era, Jyodo sect, Jishu sect

1. はじめに

平成 23 年 8 月 29 日から平成 24 年 2 月 29 日まで、熊本県八代市内の建造物 578 件の悉皆調査を行った結果⁽¹⁾、近世に建設されたと考えられる多くの寺院があることが分かった。しかしこれらに関する既往研究⁽²⁾は少なく、十分な調査が行われていないのが現状である。

そこで筆者は同市内の寺院調査を開始したところであり、そのうち 3 軒の寺院については、既に報告済みである⁽³⁾。

熊本県八代市本町 1 丁目（旧紺屋町）にある雲谷山荘厳寺についても、中世の八代領主、相良氏の菩提所に始まる由緒ある寺院であるが、その建築的調査が行われていなかった。一方、1795（寛政 15）年当時の当寺院の間取りを描いた絵図が永青文庫に残されているのが分かった⁽⁴⁾。そこでこの論文では、当寺院の実測・ヒアリング調査⁽⁵⁾、文献調査、ならびに上記の絵図との比較を通して、当寺院の建築的特徴を明らかにすることを目的とする。

すでに当寺院について論じてきた⁽⁶⁾が、今回は調査結果についてより詳細に報告するとともに、当寺院が浄土宗寺院であることに着目し、浄土宗寺院の典型との比較を行い、

当寺院の特徴をより明確に示す。

2. 荘厳寺について

1229（寛喜元）年、浄土宗鎮西派の辨阿上人または深阿上人の開基により⁽⁷⁾創建される。松求麻村今泉にあったが、1481（文明 16）年、相良爲續が八代進出時に菩提寺に取り上げ、時宗に改める。この時、古麓城下である八代郡古麓村に移転する⁽⁸⁾。荘厳寺は相良氏の『八代日記』にしばしば記述されており⁽⁹⁾。木下潔は、相良氏の迎賓館的役割を果たしていたようだと考察している⁽¹⁰⁾。

1581（天正 9）年に相良氏が球磨へ退くも、荘厳寺は存続する。小西行長時代（1588～1600）には衰退するが、関ヶ原の合戦後、八代が加藤氏の領有地になると、釋譽上人の中興により八代麦島城下に移転する⁽¹¹⁾。この時、浄土宗鎮西派に復する。その場所は「雲谷山荘厳寺口鎮守天神縁起」（以下「縁起」）に「球磨川ノ邊二遷ス、今ノ渡口ノ一町餘東ナリ」とある。

1619（元和 5）年の地震で麦島城が崩壊後、松江城が築城され（1622（元和 8））、荘厳寺も現在地となる松江城下に移転した（図 1）。これを「荘厳寺諸記録」（以下「諸記録」）には「草堂」と記している。

* 建築社会デザイン工学科
〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627
Dept. of Architecture and Civil Design Engineering,
2627 Hirayama, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501
** 株式会社鹿島クレス

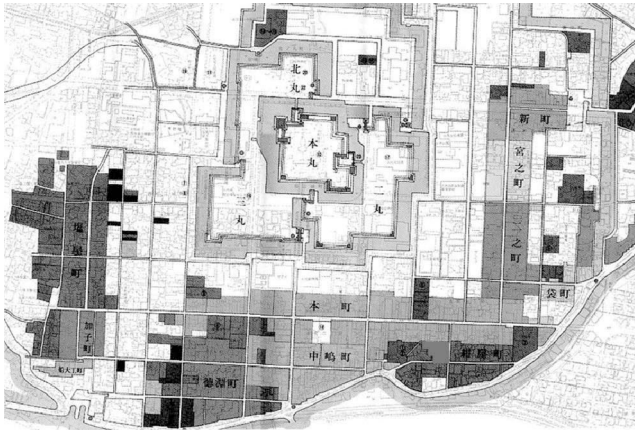


図1 松江城下における荘厳寺の位置
(八代城町絵図 (八代市教育委員会作成))

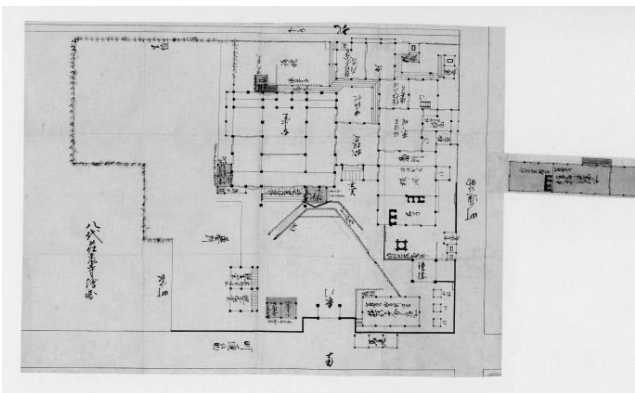


図2 八代町 荘厳寺絵図
(『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅰ』所蔵)

3. 永青文庫所蔵「八代町 荘厳寺絵図」(図2)

細川家に伝来する歴史資料・美術品等の管理保存、研究、公開する永青文庫には、荘厳寺を描いた絵図「八代町 荘厳寺絵図」(8,4,62,丁)が所蔵されている。この絵図は『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅰ』(熊本大学文学部所属永青文庫研究センター編, 2011)に掲載され⁽¹²⁾出版された。

この絵図は1795(寛政7)年3月25日、遊行上人が熊本阿弥陀寺を發ち、荘厳寺を訪問した際に描かれたと考えられている⁽¹³⁾。

寺地は南、東側の道路に面する角地にあり、南側前面道路に表門⁽¹⁴⁾を開く。門より左斜め方向に本堂を配し、本堂裏を「御池」とする。住職によれば、この「御池」には築山があったようだが、44-45年前に鉄筋コンクリート造の納骨堂が建てられた⁽¹⁵⁾。

本堂は南向き、桁行5間で梁間は7間、位牌壇の前柱を除けば6間である。正面の切目縁は中央間の巾だけで、正面向かって右に切妻屋根の記号がある。これはもちろん向拝ではない。「賦札」と記されているので、時宗の遊行上人が巡歴時に御賦算⁽¹⁶⁾する念仏札に関する設備と考えられる。

庫裏は東側道路に寄せ、土間を介して「鐘楼」に接している。庫裏と本堂を3間四方の「拭板敷」の玄関の間を備える式台玄関が繋ぐ。現在の呼称は「玄関」である。その奥に「中御池」と記された中庭がある。庫裏の奥には、その記述から遊行上人を迎えたと考えられる「座敷」がある。

「座敷」は出床が飾られ、「次」の間を備え、「御池」と「中御池」に面し縁側が回っている。現在の呼称は「座敷」である。

庫裏は1979年頃に鉄筋コンクリート造に改築され、隣接した「鐘楼」はその際に撤去されている。改築以前の状況は、住職によれば、土間、井戸、かまど、鐘楼の位置が、この絵図とほぼ同じだったということである⁽¹⁷⁾。

この他、境内には「観音堂」⁽¹⁸⁾、「地藏堂」⁽¹⁹⁾、「遊行上人」と記されている堂、小社⁽²⁰⁾等が記載されているが現在はない。住職によれば、「遊行上人」の堂の位置に近年では「天神堂」があったようだが、これも1979年頃に取り壊されており、この「天神堂」にあった梅鉢紋入りの墓股が本堂正面に飾られている⁽²¹⁾。ちなみに「縁起」では、遊行上人が古麓へ奉持した天神像により雷が収まったため、相良氏が守護神にしたと伝えており、この由緒を考慮すれば、「遊行上人」の堂は、そのまま「天神堂」と解釈してよいと考えられる。

総じて寺地の状況、現存する諸堂の向き、配置は現状と絵図を比較してほぼ変わりがない。

また当時はすでに浄土宗に復した後であるにも関わらず、「賦札」の設備や「遊行上人」の堂など、時宗の影響が強いことが分かった。そもそもこの絵図自体が遊行上人の訪問を契機に描かれたものであるし、「諸記録」には、その他に1674(延宝2)年、1696(元禄9)年にも遊行上人の宿坊となっていることが記録されている。

4. 荘厳寺の現況(写真1, 図3)と絵図との比較



写真1 南西からの外観(平成25年12月11日撮影)

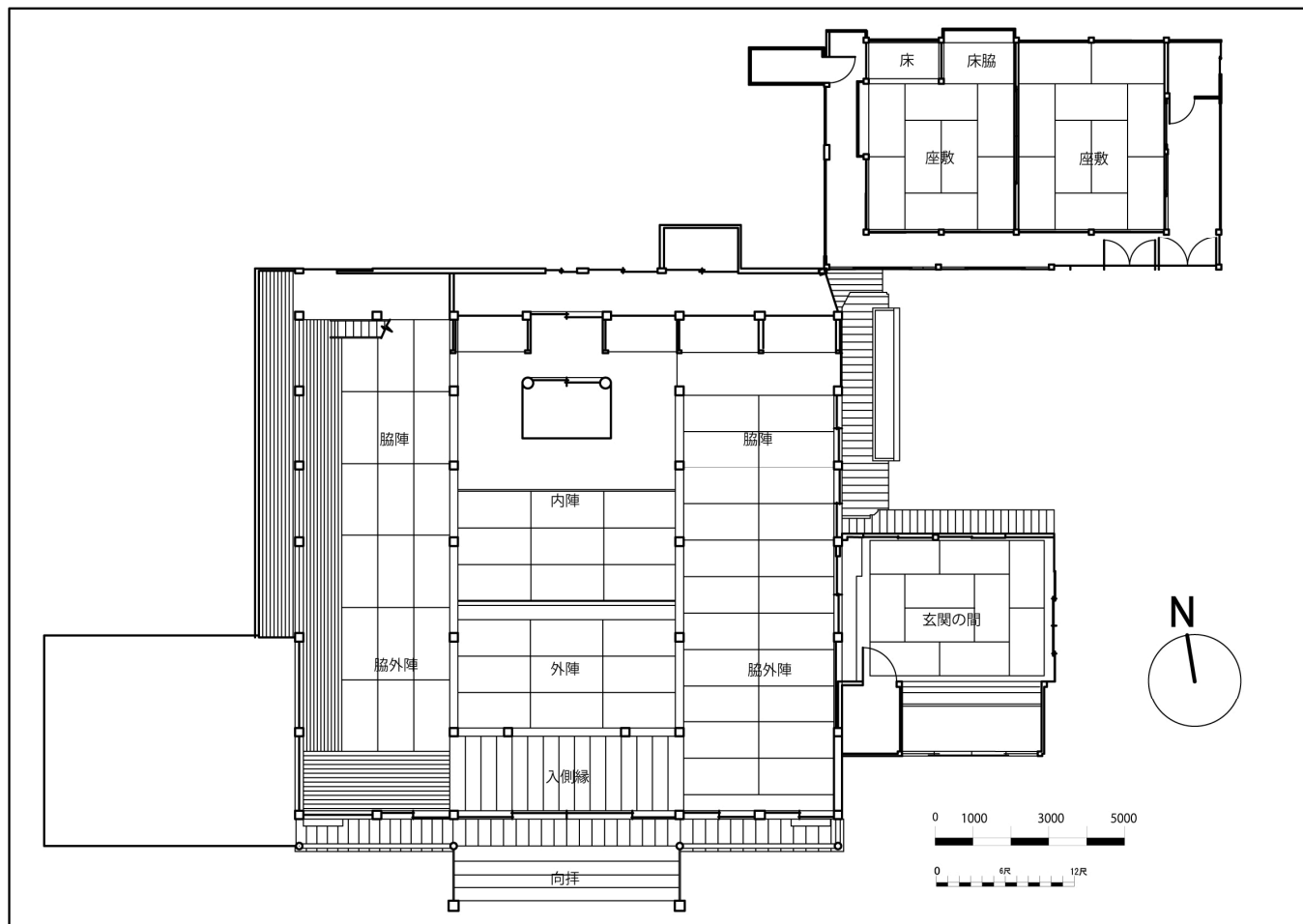


図3 荘厳寺 現状実測平面図

本堂は南向き、桁行5間梁間6間で、絵図と向き、規模が同じである。屋根は寄棟造しこゝろ屋根で、平入向拝付きである。

向拝は、几帳面取り角柱の向拝柱、象鼻の木鼻、連三斗の組物、菊花の手挟みとし、中備えは大斗肘木を二つとする。側柱筋へは雲文の繫虹梁とするが、側柱の痕跡(写真2)から、本来は海老虹梁であったと考えられる。

身舎の正面に奥行852mmの切目縁の広縁が本堂幅いっぱいあり、正面開口部は全てガラスの引き戸である。しかし脇の柱に腰貫の痕跡(写真3)があることから、本来、脇は窓だった可能性がある。絵図(図4)においても広縁は中央柱間にしかないの、絵図が描かれた当時、掃き出しの

戸は中央柱間だけで、脇の柱間は窓だったと考えられる。

室内に入側縁があるが、入側縁の板敷は中央のみで、左右は脇外陣から畳が延長して右は、幅420mmの側板を残して敷き詰め、左は部分的に畳が置かれる。しかし外陣中央間との境に透かし彫り欄間(写真4)、長押、左脇外陣との境に長押、鴨居がつくことから、絵図に示す通り(図5)当初から外陣とは異なる入側縁として計画されていたと考えられる。ただし右脇外陣との境には長押がなく、外陣中央間境の長押はそのまま直角に折れ、外陣中央間と脇外陣の境を構成している(写真5)ことは注記しておきたい。

外陣中央間境は、3間で構成され、中央が広く、またこの中央柱間だけに欄間がある。欄間は中央が竹と松をあしら



写真2 海老虹梁の痕跡
(平成25年9月10日撮影)



写真3 腰貫の痕跡
(平成25年9月10日撮影)

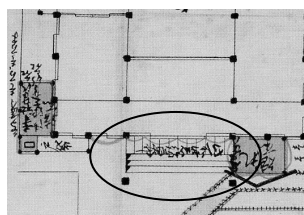


図4 正面中央間の広縁



写真4 入側縁の欄間
(平成25年9月10日撮影)

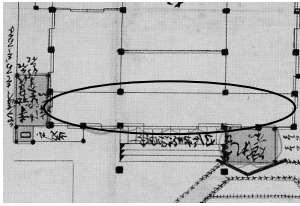


図5 入側縁



写真5 外陣中央間の長押
(平成25年9月10日撮影)



写真9 脇陣境の痕跡
(平成25年9月10日撮影)

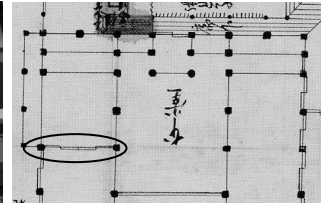


図7 左脇陣境



写真6 位牌壇の三ッ笹紋
(平成25年9月10日撮影)

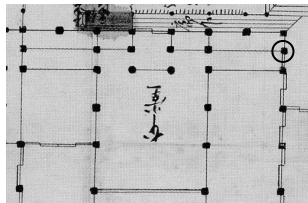


図6 位牌壇の前柱

った透かしで、左右には「天神堂」に由来すると考えられる梅鉢紋が描かれ、松竹梅を表現している。この欄間の左右に野草の板絵が嵌められている。欄間上部には増上寺大僧正走譽の書による「雲谷山」の扁額がかかる。

ちなみに入側縁の左脇の上部に1881(明治14)年に棚が吊られており、現在は八代妙見祭の笠鉾・猩々が収納されている。

左右の脇外陣は入側縁との関係同様、脇陣との境がなく、畳敷が脇陣まで連続して続く。右脇陣の奥は198mmの上段となり位牌壇がある。上段は現在フローリング材が敷かれているが、框の上部の小壁には内法長押と二本溝の鴨居があることから、上段は本来、位牌間だったと考えられる。位牌壇の小壁は、近世八代の領主・松井家の三ッ笹紋の透かし彫りの板壁である(写真6)。

また絵図では位牌壇前柱の柱が他の柱と同じ大きさの柱として描かれているが(図6)、これは誤記で、むしろ現状の三寸角柱ではなかったかと推察する。

左脇陣には現状では位牌壇がないが、奥から1間の柱に飛貫、内法貫のほぞ穴の痕跡が残る(写真7)ことから、絵図の示す通り、かつては、右と同様に位牌間があったと考えられる。

左脇陣の奥に後補の階段があるが(写真8)、これは前述の本堂裏に増築した鉄筋コンクリート造の納骨堂への入口である。入側縁左側、左脇外陣、左脇陣に畳が敷き残された板敷部分はこの階段への動線として計画されたものだと分かる。

また左脇外陣の正面より3間目の柱にほぞ穴、二本溝の鴨居の痕跡(写真9)があることから、本来この位置が脇外陣・脇陣境だったとわかる。絵図にはこの位置に引き戸の表示がある(図7)。脇陣がかつてはこのように明確に区分されていたはずであるが、ここでも注記しておきたいのは、右脇陣については絵図においても、現状の痕跡においても脇陣境が存在していないという点である。

外陣中央間は中柱によって脇陣と区分されており、この点から浄土真宗の本堂のような印象を受ける。入側縁との境となる正面、脇外陣との境となる側面の長押は、内陣、位牌間の長押より一段低く、脇外陣・脇間の側柱筋の長押と同じ高さである(写真10)。鴨居は無目で、欄間は竹の節欄間である。このことから、内陣と位牌壇が他と区分された空間とし構想されているのが分かる。

内陣境(写真11)は正面から3間目の柱筋である。虹梁に二本の束を立て、間に箴欄間を嵌める。束に挿肘木で出組を組み、蛇腹支輪とする。建具は立てず、御簾を吊る。身舎での彩色、組物はこの内陣境と内陣内部だけである。

内陣上段が、外陣中央間に、正面から2間目と3間目の柱の間まで張り出している。段差は143mmで上段側面全体に浄土宗の特徴である結界が巡り、正面には結界の痕跡だけが残る(写真12)。絵図では上段の位置が正面から2間目の柱筋に描かれている(図8)が、痕跡がないことから、絵図の誤記と推測する。



写真7 位牌間の貫の痕跡
(平成25年9月10日撮影)



写真8 左の脇外陣・脇陣
(平成25年9月10日撮影)



写真10 右の脇陣・脇外陣
(平成25年9月10日撮影)



写真11 内陣境
(平成25年9月10日撮影)

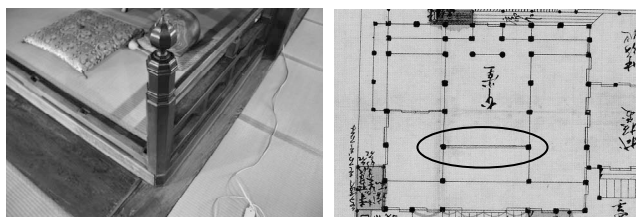


写真12 結界
(平成25年9月10日撮影)

図8 上段の位置



写真15 玄関の間の痕跡
(平成25年9月10日撮影)

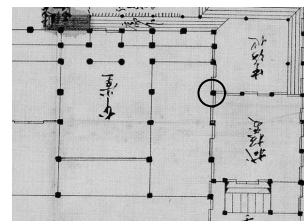


図9 玄関の間の痕跡
のある柱

また外陣中央間には人天蓋が吊られている。

内陣は後門形式で来迎壁は雲と蓮が描かれ、円弧状にくぼみ(写真13)、来迎柱は唯一の丸柱で金箔、極彩色である(写真14)。来迎柱間には花頭形の垂れ壁が下がる。雲と蓮は脇壇の壁等にも繰り返し描かれる。脇壇小壁は花頭形に上下に見切られ、上部には雲中菩薩が描かれる。内陣、外陣の彩色は、板書きより、1933(昭和8)年に仏師、原新次郎等により手が入られていることが分かる。

この他、1977~78年頃に増築された鉄筋コンクリート造の物置が本堂の左側にある。

現状は部分的に改修されているものの、痕跡から判断する限り、絵図とほぼ同じように復原することができる。このことから、現存する本堂は絵図が描かれた1795(寛政15)年以前の建設であると考えられる。

「玄関」には10畳敷きの玄関の間がある。住職によれば当部分は改築と伝えられている⁽²²⁾。本堂の正面から4間目の外周東側の柱には、中庭側にほぞ穴の痕跡があり(写真15)、改築以前はここまであったと考えられるが、これは絵図に描かれているのと同じである(図9)。つまり改築の際に、1間分を減築したと言えよう。

住職によれば大正時代の改築と伝えられる⁽²³⁾奥の「座敷」は、9畳の座敷と10畳の次の間からなる。座敷は出床の床、松棚の床脇、付書院からなる本床の構成である(写真16)。平面図だけでは絵図とほぼ同じであることが分かるが、このことから「座敷」は改築時に、以前のかたちを踏襲したと言えよう。ただし次の間には鉄筋を木舞とする四方入隅の下地窓(写真17)があり、近代の建築であることが分かる。



写真13 来迎壁のカーブ
(平成25年9月10日撮影)



写真14 来迎柱
(平成25年9月10日撮影)



写真16 座敷の座敷飾り
(平成25年12月11日撮影)



写真17 次の間の下地窓
(平成25年12月11日撮影)

5. 荘厳寺本堂の柱間寸法

柱間寸法の算出にあたり1尺を303mmで計算する。

桁行の柱間寸法は、脇外陣が芯々で2028~2078mmで6.7~6.9尺であった。脇外陣を通して見て内法で判断すると、左脇は内法で1間1961mm(6.5尺)、右脇は内法で1間1953mm(6.4尺)であった。中央は芯々で5988mm、これを畳枚数から3で割ると1996mm(6.6尺)であった。中央を内法で判断すると、1間1922mm(6.3尺)であった。

梁間では、入側縁は芯々で2171mm(7.2尺)、内法で1953mm(6.4尺)であった。外陣は芯々で2511~2514mmであったが、畳枚数相当の2.5で割ると1間6.6尺であった。内法では1間1921mm(6.3尺)であった、内陣は芯々で1979~2015mm(6.5~6.7尺)、内法で1間1919mm(6.3尺)であった。

内法制と芯々制からモジュールを算出すると、桁行の中央間、梁間の外陣・内陣は京間に相当する6.3尺の内法制であることが分かる。その他についても6.4~6.5尺の内法制の傾向が見て取れる。

枝割では、梁間が望見できないため、桁行だけを見れば左右の脇が10支、中央が15支となっている。

次に柱径をみると、向拝柱、来迎柱を除く柱径は208~236mmで、これは八代市内の他の寺院と比較すると、本成寺(1716(享保元))に近く、1668(寛文8)年を遡ると推察される安養寺より小さく、春光寺(1887(明治10))より大きい⁽²⁴⁾。

更に身舎全体の梁間間数は6間である。荘厳寺本堂がしころ屋根であることも考え合わせると、寛文8年令(1668(寛文8))⁽²⁵⁾の三間梁規制が適応された建築と考えられ

る。つまり梁間3間と両側に1.5間の庇からなる6間の建築として建築されたということである⁽²⁶⁾。とすれば、現存する本堂は1668(寛文8)年以降に建設されたということが分かる。

6. 浄土宗寺院の本堂としての特徴

浄土宗寺院本堂の特徴や系譜については、桜井敏雄による研究がある⁽²⁷⁾。近世寺院は幕府により本末制度が導入されることで、本山寺院を頂点とし各宗派が強固に結び付き、その結果、各宗派特有の典型的な本堂形式を確立していく。浄土宗においても同様であるが、桜井は、その中でも「意外な進展が認められてきて、予期に反する結果となった」とし、その系譜を提示している。

桜井はまず大きく本堂タイプと方丈タイプに分類する。方丈タイプは住居風の本堂で内陣や外陣など全てを建具で仕切る閉鎖的なタイプである。莊嚴寺の場合はこれに当てはまらない。

本堂タイプは、徐々に堂内を開放的にしていく進展がみられ、結界、上段、建具、小壁などによる境界の変化に着目されている。江戸時代初期にみられたAタイプは、内陣・脇陣と外陣を明確に区分するもので、結界となる中敷居で区切られ建具が立てられることで、内・外陣間の往来が遮られている。Cタイプは享保頃までみられるタイプで、外陣・脇陣境が敷居となることで、外陣と脇陣間の往来が可能となる。この両タイプが、数量的にも多いようである。Dタイプは江戸時代中期の天和頃から幕末までみられ、外陣・脇陣境が無目敷居になり建具が入らず、内陣も框のみに代わる。Eタイプは享保頃から幕末にみられ、外陣・脇陣境の小壁・欄間さえ除かれ脇陣が外陣化する。

また脇陣の背後に位牌壇または、建具が立てられた位牌の間が設けられるが、内陣の中敷居や框は位牌間と連続し、凸型の内陣空間を形成する。脇陣が開放されるに従って、この空間が際立ってくると言えよう。一方、脇陣と外陣は凹型の外陣空間とみなされる。外陣の拡張のために正・側面入側縁をとりこむ事例もあるようだ。

その他、内陣は丸柱、組物、極彩色によって荘嚴される。

このように既に明らかにされている浄土宗本堂の典型と比較し、莊嚴寺の特徴をさらに確認したい。

まず左脇陣に現在はない位牌壇、位牌間であるが、痕跡から絵図のようであったと推測を行った。また右位牌間と内陣は現在も上段である。このことから位牌間と内陣が凸型で構成された内陣空間として構想されているのが分かる(図10)。右位牌間正面から内陣側面にかけて長押が連続

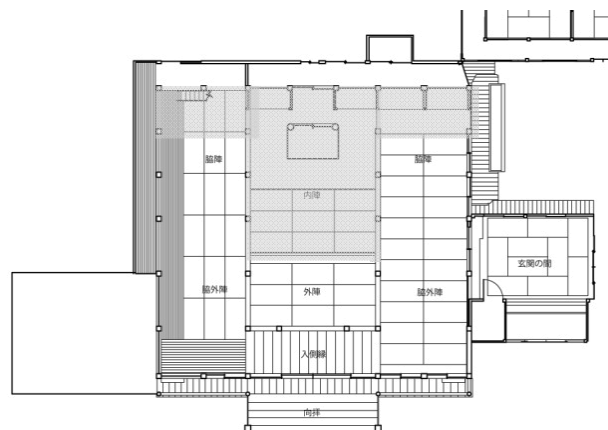


図10 凸型の内陣空間

し、外陣・脇外陣境の長押より一段高く設けられている点でも差異を意識していることが分かる。

この場合は内陣空間と外陣空間の境界は、内陣では建具がなく結界によって、位牌間は建具によって仕切られる。

次に外陣は、浄土真宗風の中柱と内陣境から外陣中央間へと突出した上段によって、縦に三分割されている。この点が浄土宗本堂の典型との大きな違いを生んでいる。外陣は梁間2間で浄土宗本堂の多くの事例に合致する⁽²⁸⁾ものの、上段がせり出すことで外陣は狭い。

狭い外陣を拡張した間取りとして、右脇外陣は桜井のEタイプにより、左脇外陣はCタイプにより、各脇陣を外陣化している。後世の左脇外陣・脇陣境の小壁と建具の撤去によって、左脇もEタイプに変更されたと言える。

同じ理由で正面入側縁が設けられたと考えられる。絵図のように入側縁中央間にのみ木階で接続される浄土宗本堂事例も多く報告されている⁽²⁹⁾。入側縁・脇外陣境は、脇外陣・脇陣境と同様に右はなく、左は長押と小壁によって仕切られている。

このように非左右対称であることも莊嚴寺の大きな特徴であるが、このようなタイプは桜井のBタイプにも見られる。Bタイプは左が中敷居で、右が通常の中敷居で、右脇陣の方が開放性が高い。

以上、莊嚴寺は特異な特徴を有しつつも、概ね浄土宗本堂の典型に従っている建築であることが分かった。

しかしさらに一つ考察をしてみる。入側縁、脇外陣、脇陣の一体性が把握されると同時に、内陣と外陣中央間の一体性もみえてくる。入側縁中央間の欄間による強調、外陣の浄土真宗風の中柱、高さは違えども長押が内陣・外陣の周囲をめぐる点、内陣境と上段のずれによる外陣・内陣の境界の曖昧さなどである。

ここで絵図が描かれた当時、浄土宗でありながら賦札や

遊行上人など時宗の影響を受けている堂や設備があったことに着目する。憶測の域は出ないが、荘厳寺の本堂にも時宗の影響があったと想定した場合、外陣・内陣の一体的な縦長の空間に、その影響をみてとることも可能であろう。

時宗本堂は遺構が少なく建築的特徴については不明な点が多いものの、踊躍念仏が時宗の特有な行法であり、そのために尾道市の西郷寺などでは内陣が縦長にとられているからである⁽³⁰⁾。

7. 建設年の考察

現存する本堂の建設年は、4章では、絵図との比較から1795（寛政15）年以前であると推察した。5章では寛文8年令が適応されていることから、1668（寛文8）以降であると推察した。

『肥後國誌』には1666（寛文6）年に「准譽再興之」⁽³¹⁾、「諸記録」では「准譽上人・寺院修営」と記されている。2章で前述したように、松江城下移転当初には「草堂」であったものを、おそらくこの時、本格的寺院へと改築したと考えられる。建設年が寛文8年令以降であるとすれば、再興と建設の間に、少しの期間がおかれたことになろう。

その他、「諸記録」では1696（元禄9）年に「修覆寺院」、1704（宝永元）年に「本堂庫裏瓦葺収造」、1739（元文4）年に「本堂瓦屋根悉葺換之」、同じく「本堂中之間天井。新造及塗白土」と修理記録が残されている。

一方、本堂右脇のEタイプは享保頃（1716～）からみられる形式であることから、建設年代については、より詳細な調査が必要である。

8. まとめ

以上の結果より、荘厳寺の建築的特徴について以下のようによまとめることができる。

1. 浄土宗寺院でありながら、「天神堂」や「賦札」、遊行上人の巡歴等、時宗や相良氏との関係が継承された。
2. 荘厳寺は、相良氏縁の由緒ある寺院であるが、松井家家紋も認められた。
3. 配置は絵図が描かれた当時とほぼ変わっていない。
4. 現在の本堂は改修がみられるものの、痕跡等から、絵図が描かれた当時の建物と言える。
5. 本堂は、6.3尺（京間）と6.45尺をモジュールとする内法制の建築であった。
6. 浄土宗本堂の特徴である凸型の内陣空間、凹型の外陣空間が認められたが、非左右対称性、内陣境のあいまいな位置、外陣・内陣の一体性といった固有の特徴も認められた。後者については時宗の影響を考察した。
7. 建設年は、寛文8年令の1668（寛文8）年から絵図が

描かれた1795（寛政7）年の間である。文書によれば寛文8年直後の建築であると考えられるが、平面形式からは享保以降である可能性も考えられる。

（平成26年9月25日受付）

（平成26年12月3日受理）

注

(1) この調査に関する報告は、拙稿：「八代市内建造物の悉皆調査の報告とその建築的特性に関する考察」、熊本高専紀要、第4号、pp.65-72、(2012)を参照。

(2) 八代市内の寺院に関する既往研究は以下である。

原田聰明：「近世寺院建築（地藏堂）に関する研究 熊本県八代市川原地蔵堂、塩屋地蔵堂について」、日本建築学会中国支部研究報告集、第11巻1号、pp.193-196、(1983)。

熊本県の近世社寺建築—熊本県近世社寺建築緊急調査報告書一、熊本県教育委員会、(1987)。

尾道建二・北野隆：「熊本県八代市の法輪寺本堂について(2)」、日本建築学会中国・九州支部研究報告、第10号、pp.561-564、(1996)。

下田雅子・北野隆：「八代城下町の町人地にみられる社・堂について」、日本建築学会九州支部報告、第36号、pp.365-368、(1997)。

(3) 森山・原田聰明：八代市における近世寺院、安養寺、本成寺、春光寺について、日本建築学会研究報告九州支部、第52号・3、pp.601-604、(2014)。

森山・原田聰明・石本和真：八代市内の寺院である安養寺、本成寺、春光寺の建築的特徴、熊本高専紀要、第5号、pp.75-82、(2013)。

(4) 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編：細川家文書 絵図・地図・指図編I、吉川弘文館、2011、p.153。

(5) 平成25年9月10日、12月11日に実施した。

(6) 才塚：八代市の近世寺院荘厳寺の特徴について、平成25年度熊本高等専門学校課題研究、(2014)。

森山：熊本県八代市にある荘厳寺について、日本建築学会大会学術講演梗概集、F-1、pp.7-8、(2014)。

(7) 「陣述誌」、「雲谷山荘厳寺 鎮守天神縁起」、「荘厳寺諸記録」では後者の説、『肥後國誌』下巻(p.275)、『八代郡誌』(p.515)では両説を掲載。

「陣述誌」は『肥後國誌』に、「雲谷山荘厳寺 鎮守天神縁起」、「荘厳寺諸記録」は『江戸時代の八代—八代城下町の変遷と寺社考—』に所収されている。各書は以下の通り。後藤是山：肥後國誌、下巻、新潮社、(1972)。

石川愛郷：八代郡誌、臨川書店、(1927)。

木下潔：江戸時代の八代—八代城下町の変遷と寺社考一、

私家版, (2009).

(8) 木下は各書が寺地と記す「杭瀬」「杭瀬道場」「杭瀬道場馬場」「杭瀬市中」は、『八代日記』の記載から、1555(天文24)年の火災後の移転先と考察している(木下潔:前掲書, p.65).

(9) 『八代日記』(八代市教育委員会, 2013)に12回登場する(p.31, 78, 85, 105, 111, 112, 121, 162, 253, 338, 347, 348).

(10) 木下潔:前掲書, p.65.

(11) 『八代郡誌』(p.515)は1600(慶長5)年に釋譽上人により移転・再興したと記すが、「陣迹誌」「縁起」「諸記録」では洞譽上人による再興の後に、1601(慶長6)年に釋譽上人が移転したと記している。「縁起」は移転の年を1601(慶長6)年、「諸記録」では再興を1600(慶長5)年、移転を1601(慶長6)年としている。

(12) 熊本大学文学部所属永青文庫研究センター編:永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編I, 吉川弘文館, p.153, (2011).

(13) 同書:収録資料目録 p.27. ちなみに遊行上人とは開祖・一遍上人をはじめ、清浄光寺(遊行寺)を拠点に諸国を巡歴する時宗の指導者のこと。

(14) 「諸記録」に1674(延宝2)年「新造」とあるが、当時のものかは不明。

(15) 現住職へのヒアリング調査(平成25年12月11日).

(15) 時宗で「南無阿弥陀仏」と書かれた念仏札を配ること。

(17) 現住職へのヒアリング調査(平成25年12月11日). 井戸は現存する。

(18) 「諸記録」に1701(元禄14)年「十一面堂再興」とある。

(19) 「諸記録」に1704(宝永元)年に建立とある。

(20) 「諸記録」に1704(宝永元)年に「稻荷明神像社建立」とある。

(21) 現住職へのヒアリング調査(平成25年12月11日). また『肥後國誌』下巻(p.275)には「寺内ニ天満宮アリ」と記されている。

(22) 現住職へのヒアリング調査(平成25年12月11日).

(23) 同上。

(24) 森山・原田聡明・石本和真:八代市内の寺院である安養寺, 本成寺, 春光寺の建築的特徴, 熊本高専紀要, 第5号, pp.75-82, (2013).

(25) 光井渉:近世社寺境内とその建築, 中央公論美術出版社, p.124, (2001). に, 高柳真三・石井良助校訂:御触書寛保集成, 岩波書店, (1934). から引用した条文が以下のように掲載されている。

「一梁行京間三間を限へし,

但, 桁行は心次第たるへし,

一佛壇つものや京間三間四方を限へし,

一四方しころ庇京間壹間半を限へし,

一小棟作たるへし,

一ひち木作より上の結構無用たるへし,

右, 堂舎客殿方丈庫裏其他何ニても, 此定より梁間ひろく作へからず, 若ひろく可作之子細於有之は, 寺社奉行所え申伺之, 可任差図候以上」

(26) 寛文八年令の内容と実際の適応例については, 光井渉:前掲書に詳しいが, 実質, 全体で6間を守る限り, 内部の間取りの変更は黙認する, といった当時の状況については, pp.134-140を参照。

(27) 桜井敏雄・大草一憲:近世浄土宗仏堂の平面形態と系譜(その1), 近畿大学理工学部研究報告, 10, pp.155-167, (1975).

同:近世浄土宗仏堂の平面形態と系譜(その2), 近畿大学理工学部研究報告, 10, pp.169-178, (1975).

同:近世浄土宗仏堂の平面形態と系譜(その3), 近畿大学理工学部研究報告, 10, pp.179-191, (1975).

同:近世浄土宗寺院本堂の研究(I), 日本建築学会近畿支部研究報告集, pp.263-266, (1973).

同:近世浄土宗寺院本堂の研究(II), 日本建築学会近畿支部研究報告集, pp.267-270, (1973).

同:近世浄土宗寺院本堂の研究(III), 日本建築学会近畿支部研究報告集, pp.271-274, (1973).

(28) 桜井敏雄・吉信都夫:近世在郷浄土宗寺院本堂に関する一考察一本郷町・竹原市・安芸津町・安浦町・川尻町・呉市を中心として一, 日本建築学会中国支部研究報告, pp.65-68, (1968).

(29) 桜井敏雄・吉信都夫・大草一憲:浄土宗寺院本堂について(I)一萩市及び益田市の遺構一, 日本建築学会中国支部研究報告, pp.93-96, (1973).

同:浄土宗寺院本堂について(II)一萩市及び益田市の遺構一, 日本建築学会中国支部研究報告, pp.97-100, (1973).

同:浄土宗寺院本堂について(III)一萩市及び益田市の遺構一, 日本建築学会中国支部研究報告, pp.101-104, (1973).

浅野清・岡野清・杉野丞:東海地方における浄土宗本堂の研究(2)常満寺本堂, 専念寺本堂, 祐福寺本堂, 日本建築学会東海支部研究報告, pp.269-272, (1979).

(30) 伊藤延男:時宗の建築, 仏教芸術, 185, pp.104-111, (1989.7).

(31) 後藤是山:肥後國誌, 下巻, 青潮社, p.275, (1972).